

特61
917

四
書
活
解

明治
48.10.27
内閣

自序

活動の大なるだけ、不動の必要なるは、大洋の巨濤を凌ぐ船舶の、河川の淺流を行く短艇よりも、重量の多大にして、不動の姿勢の必要なると同じ。

皮想を概見する人の、道義を以て、因循儉安隠士逸人の夢想とするは、何ぞ誤れるの甚しき。

此書は敢て大なる眞價ある活動家の前に提供し、重厚不動の修養、強固健全の成功を遂ぐる、基本の一端たらしめんことを、蠢乎たる妄動輕進の徒、頑然たる僻拗退嬰の輩は讀んで何の益する所なかるべければ也。

明治四十二年

坳堂識

凡例

- 一 眞理は古今に通ずれども、事實は日月に變ず、故に此著、四書中の眞理を取つて、事實を略す。
- 一 四書もごこれ一貫の道、故に同意義の句章、又は換骨脱胎の文辞、重複雜出すること多し、其場合一章を擧げて、類似の語を其下に列擧す。

一 孔門人物養成の法、應病與藥その材を成
 さしむ、故に衝突矛盾の語、假令ば、視義不
 爲無勇也と云ひ、又た、君子不近危と云へ
 る類多し、斯の如きものは、評釋法を以て
 分析す。

一 四書の釋義、古今百家に上る、此書流派に
 偏せず、穩健なる者を取り、敷衍するに卑
 見を以てす。

一 四書に由つて修養の基を立てんとする
 ものは、此書を繙きたる後、先秦の歴史を
 繹ね、時代を背景とし、而して更に四書正
 文を通讀し、孔孟曾思の行事を參伍錯綜
 する最も可なり。

總論

(一) 歴史は必しも眞を語らず

故に吾人は必ずしも現代を以て、澆季末世倫常没却の骨頂なりと推
断せず、然れども維新一面に於いて舊慣打破を意味せる維新一の
烈風に、儒道、佛教、武士道、乃至、俠風、意氣地、の敗滅に瀕し
温厚なる君子、高潔なる僧尼、豪勢なる町奴、操守ある歌姫舞妓、
苟も以て風教を鼓吹し、道義を支持する、模範的行爲の聞ゆるなき
は確言し得べし。

何が故ぞ、由く信念の缺乏は即ちこれが基因たるなり、西洋文物に
迷醉したる一時の風潮は、終に邦國千歳の支柱たりし各般階級を通
じての信念を破却し、彼れ取るに足らず此れ守るに足らずてふ叫聲

總

論

(一)

は高うして、斯く違ふべく行ふべしと、統一せる鮮明なる標幟は未だ建てられざるなり、舊時の玉石共に焼かれて、漸新なるダイヤモンドの未だ顯はれざる、民衆それ何に倚頼してよく迷顛倒施なきを得んや。

衣や食や住や、科學の發達は利用厚生の道に於いて、實地應用の精を極むるに至れり、然れども實地以外に些の餘裕を存せざる時は、終には現存せる實地應用も萎靡屯運して振はざるに至る、人の足たる履む所その幅一尺に過ぐるものなし、而かも吾人は常に幅數尺以上なる橋梁を要求するは何が故ぞ、有用の用を助くるに無用の用の缺くべからざる所以なり。

實地々々に倦厭したる、否、漸く危險を覺醒したる民衆が、足の履

む以外の地幅、即ち信念てふ餘裕を求むるの趨向あるは自然の理法にして、是ありてこそ、眞誠なる意義に於ける活動は表現し得べきなり。

此の要求の一部を元たすべく、吾人が茲に儒教中最も日常倫理に豊富なる意味と實例を含蓄せる四書の談柄を以てするは抑も亦た説あり。

(二) 世人或は云はん

既に西洋文物を咀嚼せる人に、自ら西洋倫理學の研究あり、主義の鮮明にして、理論の精緻なる、今更何ぞ朽廢に庶かき儒教々義の叫號を求めんやと。

而かも思へ、科學として研究せらるゝ西洋倫理學は、動もすれば實

行と没交渉たり易き傾向を有し、儒教々義の尤も實踐躬行せずしては眞味を鮮明し能はざる學風と、其間世道人心の改善に關する威力に、甚大なる徑庭を存することを。

事實は正確なる證明を與ふ、儒學に養成せられたる漢士、儒學を輸入し來つて行道の標的とせりし、我邦中古以來、に於いて、秋霜烈日の傑士、高風尙徳の君子人を輩出せしめたるに對し、倫理學を研究したる西洋學者の道徳的實踐躬行者が餘りに寥々たる、よし是れ有るも一部分にして、儒教精神の普通的成績と、大なる優劣あるは、多少讀書眼を具ふるもの、均しく認むる所にして、強ちに我田引水の議に讀者を誤るものに非ず。

然れども、歲月は推移し、事物は代謝し、人心は發展す、教義豈獨

りこれに伴はざるを得んや、原始儒學は先秦に、程朱儒學は趙宋に、王氏儒學は明代に、各々時代の要求が産出したる特色にして、我が明治豈に古代學説を踏襲し改進せざるの理あらんや。

孔、孟、子思は聖たり賢たり、然れども明治四十幾年の日本が斯くくの狀態ならんと豫期してなせる言行にあらねば、言々句々吾人の規準たり得る資格なきは當然なり、吾人が本書を著はすに際し、拆衷取捨の必要を感じ、逐條講譯の陋を避けたる理由は即ち是れなり。

(三) 變 不 變

然れども吾人は、事物に體と用とあり、體の永劫不變にして、用の刻々變易すべき、萬有の理法を知らざるべからず。

路頭知人に相逢ふて、「甚だしき寒さにも不相變御健康にて」と挨拶

すれば彼れは必ず好意として之れを迎へん、若し「時々刻々に進歩せる世に不相變御因循に」と告ぐる時んば誰か不快の顔色を呈せざらん、即ち體の相變らぬを要し、用の相變るを要する近例にして、猶ほ物質界に於ける各種の元素が、流通轉々、或は植物を形成し、或は礦物を組織し或は動物體を構造して相變ること千萬なるも、その窒素たり酸素たる本體は常に不減不増なるが如し。

道德の説豈またこの天則を脱するを得んや、即ち學說の根底には、千古不變の理法あり、少なくとも、古代格言にして、今猶ほ眞價を有するものなかるべからず、此書に摘出したる多くの訓言は、かゝる見解に準據したるものにして、端然不動の體を説述し、これが實用に至りては、活動力に富める讀者の伎倆に峻たんのみ。

四書
活解
本
文

大學の部 五章

○大學之道在明明德在親民在止於至善。

凡そ確固たる信念の上に立たんとするものは、先づ自己はこれ何物たるかを自覺せざるべからず、古語に云はく、人は萬物の靈と釋迦曰く、天上天下唯我獨尊と、

孔子も人なり、釋迦も人なり、乃至基督もソクラテスも、其人たるに於て、何ぞ吾人と異なる所あらん、而して彼の有る所、吾人

また無かるべからず。

犬死一番考再考せよ、吾人果して能く萬物の靈たり、天上天下唯我獨尊的たり得るか。

生れて生き、生きて動き、動きて飲食し、乃至子孫を蕃殖して、忽焉と去る、は一般の動物皆自然らざるなし、これを能くして豈能く萬物の靈と濟し込むを得んや、是に於いて乎吾人は大に覺醒せざるべからず、大學一々は覺なり悟るなり一覺り得て後真によく一舉手一投足も、有意義のものたるを得るなり、然らずば營々蹴々、富百萬を累ぬるに至るも、畢竟これ動物的妄動たるに終らんのみ、何ぞよく價值ある人生の活動たるにあらん。

人の動物と異なる所、再思三考に價せずや、實に吾人が原頭を道

遙せる時、一匹小蛇の斃死するを見る時、忽ちにして惻愾の情操は湧出す、此の心たる他の動物に異なる所、即ちこれ仁の一端 飢餓瀕死、氣息奄々たる時に於いて、これを得れば生き、得ざれば死すると云へる場合に於ける、一顆の握り飯も、蹴つてこれを供せらるれば、何人かよく屑として受くるものあらん、授くるに禮なくば、受くるを屑とせざる、此心他の動物に異なる所、即ち是れ義の一端。

死者の家に至つては、自ら整肅なるべきを思ひ、父子君臣夫婦の際、各その宜しき道を盡さんとする禮。

一物を見、一事に觸れて、その構成起因、その現狀結果を明細に探究せんとする智。

更に約しては履行の義務を思ひ、履行に難き事情あるものを約するに憚るの信。

如上の仁義禮智信これよく人、他の動物に異なる所、進化論者の一派は云はく、これ劣等なる人類が漸次に諸種の経験と、遺傳とによりて、如此するを福利なりと思惟せる情より露出したるものなりと、然れども何故に他の動物は、その経験と遺傳によりて、亦た如此美なる真なる善なる思想の域に到達せざるや、少なくとも到達すべき階段にも上らざるは何ぞや、知るべし、たゞひ経験遺傳に由りしものとすも、経験を感受し、遺傳に循化する力の他の動物に異なるもの、自然に人類に厚かりしことを、この力即ちこれ人類が萬物に靈たり得る一點の還魂丹、大學に所謂明德ある

もの即ちこれなり。

小蛇の斃死せんとするを憐むの情ありて、却つて父兄を殺弑し、朋友を害毒する人あるは何が故ぞ、命を繋ぐ握り飯をも、禮を缺きて授けらるれば、これを斥くる高潔なる心情ありながら、百金千金となる時んば、自ら禮を破りても奪掠せんと謀るに至れるは何の故ぞ、乃至は禮に智に信に、これありて他の動物に優れりてふ美質を、好んで自ら破棄するに至るは何が故ぞ、皆これ不正なる慾情を遂行せんと欲するの私心を以て、天與の惠福を傷害するものにして、人間如何、の問題を自覺し、浩然世に處せんとするもの、避けざるべからざる所、故に教ゆらく、在明明德、と。嵐山の櫻、月瀬の梅、これを書畫に見、これを他人に聴くのみに

ては、景致に明らかなる者にあらず、必ずや實地に踏査し觀察して後、始めて委曲明らかならん、所謂仁義禮智信——即ち明德——もこれを明らかならしめんには、實踐躬行、の餘ならざるべからず現時、書籍と先輩とに傳へ聞きたる道德家の多き、終に明德の發揮せられざる所以なり。

人若し明德の實踐に慣れて、自然に性格を形成するに至らば、苦愁怨恨の中を攪亂することなく、難澁葛藤の外に攻撃さるゝなきは、有道者の處世振りを見てこれを察知すべく、その悠揚なる心事、その綽々たる行爲、恍然人を魅し得るの態あり、自覺こゝに至つて全し、即ちこの樂境を人に分たん爲め、また他を親へて同化順應せしむるの慈悲心を出す、これを覺他と云ひ、親民と云ふ。

既に萬物に靈長たる明德を、實踐し明らかにし來つて、兼ねて民衆に及ぼし、敗徳悖義、凡そ人間苦痛の起因たる行動を取ることかく、各々其分に應じ、位に素し、向上の一路を忘れざると共に現在の地位を忘れざる、周到なる思慮、謹直なる操守、加ふるに浩然悠然、餘裕ある心事を以てすれば、茲に人間の天職はその職業の何たるに關せず、正路を辿りて而かも、眞善美に背馳せざる成功を見るべく、自ら益し、世を救ひ、止於至善の域に入るべし、曰ふ勿れ、道德は學者のこと、何ぞ知らんや、居常一般の人士が汗額勞働の瞬時にも離るべからざるものなるを、これを離れて如何なる成功を見るも、そは苦痛多き成功、換言すれば、その業程の進歩と、社會に對する羞耻畏怖の情が正比例すべき成功

ならんのみ。

○知^{ラズ}所^ヲ先後^{スル}則^シ近^シ道^ニ矣

家を建てんには、先づ礎石を議し、材を作らんには、先づ斧鋸を求む、誰れか釣竿網罟なくして漁を想ひ、彈藥銃丸なくして獵を想ふの愚呆を笑はざらんや。

然れどもこれを人間處世の狀態に見るに、この愚呆なる痴戯は到る處に演せられ、敢て怪むものなきなり。

衛生を務めずして健康を思ひ、勉學せずして優等の卒業を望み、善に盡さずして、善果慶福を求め、惡を肆にして、窮迫苦痛を逃れんとする、皆是れ礎石の脆弱なる上に大厦を構へんとするの空

中樓閣、安んぞ耐久の堅牢を得べけんや。

更に思へ、人類が營々孜々、日夜に勉むる所、究局何等の獲物を求めつゝあるかを。

飢れて食ふべからず、凍れて着るべからざる金錢、これを得て人生の能事了れりとすべからざるは明白なり、然らば金錢を媒して得べき、高樓肥馬錦衣美食は、果して人生終局の目的なるか、否々々、羅衣繡帶何の不自由なき上流にし、猶ほ涙痕の絶わざるものありてふ實況に徴すれば、是れ亦た眞の人生と直接の關係淺きを知るべきのみ。

然らば吾人は何物を以て、最後の目的と定むべきか、曰く安心是れなり、多くの人は思へらく、若し物質に缺陷を生ぜざる時は、

其處に安心あり、其處に天國ありと、然れども思へ、世に火災あり、地震あり、汜水あり、雷電あり、疾病あり、死滅あり、各般の物質乃至は自己の身體に至る迄、有るを頼むべからず、經に曰く、妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者と。

富貴頼むべからず、健康頼むべからず、吾人は實に吾人が一點も明德に背乖せる行動を取らずして、俯仰天地に耻ぢざる底の大磐石心を養成し、この礎石の上に立てられたる、富貴や、貧賤や、疾患や、各種の順境逆境に平然として對應するの氣力を養成するの人間として先決問題たるを覺ゆるのみ、孟子の所謂義を集めて天地に塞がる底の浩然の氣とは、是れを云ふなり、かくてこそ一物儘ならぬ貧苦の境にも、猶ほ樂天地の存在を認め、萬寶自由の富

貴の地にも、猶ほ奢侈の罪を免るゝなり、人よ人よ、外物に依頼せる安心は、外物の破壊と共に、破壊せらるゝの眞理を知らば、須らく自己心中に確然たる、不動の精神を鍛練せざるべからざるを自覺し、些々たる錙銖の末に走りて、最大目的の本を忘れざれこれ即ち先後する所を知るもの、始めて共に道義を語るべきのみ。至誠融化の本を忘れて、教授技術の末に走れる教育者、活動せんが爲めに資金を増殖せんとする本を忘れて、資金を收得せば可なりと心得る貯金奴、其他一切職務に忠實ならんとする精神なくして、盲目的に蠢動せる人間の、如何に無意義にして、無價値なるかを想倒する時は、誰れか沛然として道に向ひ、先を急にし、後を緩にする勇氣の勃然として興起せざらんや、一人これに勉むれ

ば、豈獨り一人の幸福たるのみならん。

○物格モノノク而後知至ルコトニ

(格の字朱子はイタルと訓すれども、前後の文意及び連絡上、余は陽明のタラスと訓するを取る)

人の性中すでに仁義禮智信、乃至これを敷衍し應用して、父母には孝、兄弟には友、君に忠臣に慈、夫に貞妻に愛、各々其の當さに然るべき道を辯じ、無性物即ち金銀珠玉一菜一菓の微に至るまで、その用途の正否順亂を知るの能力あり、これ眞道なり、眞知なり。

然れども私情私慾の草の蔓延する所、由るべき道は否塞して、眞

知亦た陰翳を生ず。

物とは何ぞ、有形と無形とに拘はらずして、一名詞を附し得る場合、其處に物あり、これを倫理上に見るに、一物は必ず二個對立接合する場合に生ず、孝とは親に屬せず、子に屬せず、親子接合の場合に始めて孝なる一物を生ず、忠や友や慈や愛や、必ず一人格に形成さるゝものにあらずして、對人關係によりて生ずるものなり。

敬せざるべからずして敬し、愛せざるべからずして愛し、剛氣に當るべくして剛氣に、和順なるべくして和順なる、これを物格しくと云ふなり。

用ゆべくして用ゐ、費すべくして費し、貯ふべくして貯ふる、こ

れ物を格しくするなり、一物一事必ず其の然るべしと思料せる理法に随つて處し、道義と比順して、その極に至りて、實行經驗の結果は、よく萬境に順應して知る所愈々正確明察を極む、これを知至るとは云ふなり。

知ることの至るに及んでは、倫道德義は坦々として行ふべく、これを難行と思惟したりし昔日のことの、今は尋常茶飯事として、否寧ろかくせざれば、心に厭き足らぬ思ひせらるゝに至る、至道凝り來つて、至徳自然に行はれ、心の欲する所に從ふて矩を踰へざるに至れるもの、始めて強固なる精神、安樂なる心境を求むるを得ん、一道に依はんとし、一徳を行はんとして、他に束縛せらるゝが如き感あるものは、未だ實行の足らざるなり、道なるもの

は人によりて生ず、決して人に先つて道あるにあらざれば、來つて吾人を束縛する理由なきなり、而して然かく感ずるは、物を格さず、随つて理を知ることの至らざるなり、努めざるべけんや。

○小人間居爲不善無所不至見君子而後厭然揜其不善而著其善人之視已如見其肺肝然則何益矣此謂誠於中形於外故君子必慎其獨也

教師の眼前に亂暴する兒童なく、警官の眼前に撻蒲する博徒なく長上に侍して鄙野粗忽なる態度を殊更にする小人もなし、これ即ち人間良知の存するあつて、善の好むべく、惡の惡むべく、是の誇るべく、非の羞づべきを知れるが故なり。

然るにその獨坐間居の際に於ける、私慾忽ち肆にして、爲すべからざるを爲し、思ふべからざるを思ひ、次て自ら欺く、唯それ欺くなり、知らずして爲すにあらす、故に君子を見るに至つて、厭然掩ひて善事を装はんとす、然れどもその既に自心を欺きたる行爲ある時は、舉措洒然として平板なるを得ず、言貌視聽の間、自から映々然として重厚の態なし、故に曰く人之視已如見其肺肝と、言はたとひ他人の知ることなきも、人間一切の行爲、善なり、不善なりやを、自ら視察することの明らかなる時は、疚しき心、中にあれば、人に對して活潑々地なるを得ず、その他人の知ると、己れの知るとに別あれど、苦痛たるは則ち一なり。故君子必慎其獨也。

獨は一個單獨を意味す、故に古來慎獨を以て、獨居の際猶ほ恭敬を忘れずと解す、元より可なり、然れども余また別に説あり。抑も獨の宗義たる、蜀山所住の猛獸にして、英語に所謂ゴリラと其の類を同うするもの、古語に曰はく、蜀山の獨一たび叫べは群獸迹を絶ちて屏息すと。強固なる養成鍛練を経たる良知は猶ほこの猛獸の如し、一切の私慾煩腦の彙集沓至する時も、強固にして權威ある良知の一槌に、爲すべし、爲すべからず、てふ命令の一下する時、忽ちにして雲消霧散せざるべからず、畢竟慎獨とは、良知てふ猛獸の、權威を挫かで、煩腦てふ群獸を、叱咤屏息せしむるに過ぎず。禪家に塗毒鼓てふ字面あり、毒藥を塗抹せる大鼓、これを大衆團

坐の裡に搦つ時は、群衆一時に斃死すてふ譬喩談に、勇猛心の鍛練を教ゆるもの、儒の所謂慎獨と對照し來つて益々味あり。

十目の視る所、十指の指す所、人或は自己獨知に比して一層の嚴重さを感じん、然れども、吾人が一過失を犯し、一不善を行ひたる時、これを告白して却つて、爽快にして、掩はんとし、包まんとするの、却つて苦痛なるは、何人も經驗する所ならん、何となれば、不善を爲すは元より惡なり、隱微せんとする元より惡なり既に不善てふ惡を犯し、隱微てふ惡を重ねる時は、吾人は重なりたる罪惡あるだけそれだけ、甚だしき苦痛に責めらるゝなり、告白し終つて却つて肩の輕きを覺ゆる所以にして、過則勿憚於改、と云へるまたこれが爲なり。故に曾子曰十目所視十手所指

其嚴乎、と乎の字先儒はカナと訓ずれども反語として見るの意味深く、字法に叶へるを覺ゆ、嚴ならんや嚴ならず、自己單獨の知る所、却つて十目十手以上の恐るべきを云ふなり。

造次顛沛道と終始し、順逆得失義と握手せんとする者、その慎獨かくの如くならざれば、以て義を集めて浩然不動の心膽を得べからず、中庸これを換言して、道なるものは須臾も離るべからず、と云へる、かくして始めて心廣く體胖かに、動容周旋緩急宜しさを得て、言貌視聽悠揚和に適するに至る。

○心不在焉視而不見聽而不聞食而不知其味、惚れた慾目か、痘痕も笑盡と云ひ、僧がにくけりや袈裟までにくい。と云へるが如く、喜怒哀樂の感情に怱慄し、恐懼し、好樂

し、憂患する時は、事物正當の理を見るの明を失し、處置宜しきを失すること常態なり、是に於いて乎、反省の要起る。茲に暴飲家あり、家庭に於いて妻君が、夫君の健康を氣遣ひて、これに忠言するあらば、忽ち忿怒してこれを詈罵し、青樓に於いて、歌妓の一言に、忽ち盤杯を收めしむるが如き兒戯は、到る處に演せらる、これ忿慍と好樂とに由りて、同一の忠言が、或は拂逆し、或は歡迎せらるゝの明證にあらずや。

花月は無情なり、而かも看客は有情なり、或はこれに泣き、或はこれに楽しみ、情緒の均しからざる、各々その正當なる觀察を外れたるものにして、一般に感情とは、程度を過ぎさんとする性質あり、一分の冤罪に怨むものは、必ずこれを二分三分と感じ、一

個の創傷を蒙りたる時は、必ず敵の全生命を奪はんとするの熱情に狂し、一日看花の好樂を享受しては、必ず流連の快を貪ぼらんとす、而して自ら其の情の激する所、逆發露呈すでに過ぐるの罪を悟らず、一心専念に讀書する時、背後柱頭の時計の音に心つかぬが如く、銃獵家の視力よく遠方の鳥禽に及びて而かも足下の大石に心付かず、蹉躓顛倒するが如し。

心に不快なる一問題を抱ける時、知らぬ他人の來訪に接しても、何となく不快なる應接振りの出づるが如き、來訪者、何の罪あるこれ／＼を怒りを移すと云ふ、心に快心の事情ある時、出で、死者を吊してさへ、何とはなしに舉措輕々、毫も哀戚同情の態なきこれ歡樂に心耽りて、吊祭正當の理法否心情を失へるなり、故に

曰はく、心は常に明鏡の如きを要すと、物來つて映じ、事起つて照す、而かも其の去るに當つては些の斑點を止めずして、更に後者の來るを待ち、事物を最も正確に、大に過ぎず、小に失せず、有りべかゝりに反射するこれを明鏡とは云ふなり。

人心元と波瀾なし、事物に觸れて始めて起伏す、宜しく事物の去つて跡なきが如く、洒然たらしめよ、また宜しく、一尺の石を投ぜざられて、一丈の波瀾を起すの愚をなすなかるべし。

而してこれ、俗知世才に奸策を弄して、一時の虚偽を濟さんとする人物の到底夢想し能はざる所、必ずや、一個不壞の勇猛心に、萬境無礙の樂天地を求むる漢子に竣たざるべからず、何が故ぞ、
猛虎一聲山月高。

中庸の部 八章

○天命之謂性^レ率性之謂道^レ修道之謂教^レ

宇宙の間、一個の精あり、之れを太極と云ひ、精分れて氣となり質となる、氣は陽なり、質は陰なり、陰陽盪摩し、氣質氤氳して物象茲に出現し去來す、精 太極や、これを天と云ひ、氣質や、陰陽や、これを命と云ふ、體よりこれを天と云ひ、用よりこれを命と云ふ、物あれば則あり、天の物を生じて親あれば、茲に慈あり、子あれば茲に孝あり、土あれば生じ、水あれば流れ、萬象各々相得て宜しきに居る、是れを性と云ふ、由れば則ら平坦々、悖れば則ら逆滔々、盜人も戸をさして行く寒さかな、この心を擴大

すれば、何ぞ則ち他を傷けて、自ら益せんとする盜賊とならんや。各般の惡事逆行、多くはこれ性に率はざるの致す所、由るべき道に由らずして、好んで細逕邪路に向ふの私智、倫常の没却する所以、故に曰く、率性之謂道と、されば道なるものは天則なり、自然にしてこれを行ふを得べきも、習慣遺傳外來の刺激に、正路破壊して、否塞通せず、僅かに教養の力によつて、修繕改治することを得ん、元これ自己性中のものを完たからしむるものにして他より取り來つて注入改易するにあらず、故に修むると云つて、求め得ると云はず、世に性惡論者なるものあり、支那の荀子、英國のポップスの如きその巨擘なり、然れども人性若し惡なりとせば、何に由つてかこれを教ふるの餘裕あらん、人性惡なり、先聖

これが任放を思ひて、教禮を設けて陶冶薰育僅かに善を見るに至ると云へど、性惡なる先聖に何故惡の任放を思ふの心生せしかよし先聖を人間以上の特性あるものと假定すとも、性惡なる人類が、その教禮を守るを通則と心得るに至りしは怪しむべし、要するに荀子は支那戰國時代に於いて、混亂状態を熟視し、ポップスは、英國帝制と民權軋轢時代に、あらゆる慘禍を目睹して、境遇より得來れる情緒の判斷に、千歲通有の常道を謬解したるに外ならず。倫理道德の細則は、元より時と處に變ずれども、如何なることが善たり得るや、如何にして善を行ひ得るやとの問題は、人類の終始考察する所にして、古今に亘り東西に通じて異ならざる所なり。

行爲上或は蕃人の人頭祭の如く、慘酷なることを敢てするものあるも、そは人頭を多く到ぬるの善として誇り得ること、誤謬せる智識の缺乏より來れるものにして、これを以て性惡を主張するは未だし、何となれば彼等にして眞實殺人の罪惡なるを悟る智識の來る時は、彼等は他の善事と思惟すべき事に向つて、全力を注ぎ得べければなり、畢竟するに行迹の不可は未だ性體の善惡を判定すべき尺度とはならざるなり。

故に吾人の性は斷じて善なり、随つて吾人が善なりと思惟する所に全力を注ぎて行動し、惡なりと考慮する所は全力を注ぎて排除し、更にその善惡の判断が正常なり得るや否やの憑證を、博學や審思や明辨に取り、内は心に疚しきを避け、外は禮制教の合理的

なるを擇ぶは、吾人が天賦の性に率ふものにして、即ち道、即ち教たる所以なり。

○君子戒慎乎其所不睹、恐懼乎其所不聞。

響められんとて照る月にあらねど、人間これを觀賞し、囀されんとて咲く花にあらねど、人間これを觀賞す、古池や蛙飛び込む水の音、沾池乾燥水たになくば、蛙の多く飛び込むも、争で音たつる理あらんや、此の故に萬物罪なけれども、小人これを見て惡心を起す、青樓の舞妓、冶艶の装ひ、蛾眉翠黛の美を極むるも、木心石腸の漢子には何の誘惑すべき手管あるべき、盜心なくば、鍵錠を氣にせず、好色心なくば、婦女子に煩はず、世人曰く、外物

の誘惑に陥りたりと、然れどもこれ陥る所以の理由は、常に自己性格の正しからざるに由るなり、美に接して貪らんとする時、妖に對して耽らんとする時、これに克ち、これを制する、人これを克己制慾として、褒賞し嘆美す、去れど自己心中に於いて既に克制の苦勞あり、如かずこれを見聞するに先ちて、見聞すとも慾情の發生せざる迄で、確固たる性格を形成しおかん。は、これ即ち所謂、見聞せざるに豫め戒慎恐懼する方法にして、必しも他人の見聞と否とに關せざるなり。

此の習慣の漸積するに至つてや、信念—不動心—の根據牢として犯すべからざるに至り、白刃踏むべく、深淵投ずべく、身を殺し仁を成す底の境遇に至る、何ぞ區々苦しんで、克己制慾を用ゐん。

故に曰く、道は須臾も離るべからず、離るべきは道にあらずと、食事に食事の道あり、坐作に坐作の道あり、睡眠に睡眠の道あり乃至は忠君愛國に至る迄で、事に大小ありと雖も、道たるに於いては、一件のみ、大事は盡し易くして、小事は忽諸 附し易き、人間の心情然りとす、然かも思へ、大事は生涯に稀にして、小事は日常に多し、名譽なるが故に大事は務め、見榮けなきが爲に小事は忽にすと云はれ、是れ不善の時の多く積りて、善事の量の少なきなり、常不斷の修善が修養上尤も大なるは、飯粒を嚼むこととの粗なるてふ、一不合理の少なるものが、積り來れば、身體の不健康となり、忠君愛國の大節をも空しくするに至るを見れば、事前の修養の肝要缺くべからざるを知るに足らん。

○喜怒哀樂之未發謂之中發而皆中節謂之和

人間の性たる、元と喜怒哀樂の偏倚なく、大中至正にして、一點の斑紋もその靈性を汚すことなし。

世人よく性を論ず、然れども、彼等はその本源に達せず、認むる所は、情のみ、氣質のみ、何が故ぞ、試に思へ、彼れは怒性なり彼れは喜性なりと云へる批評の、屢々その正鵠を過つものなるを。怒性と云はるゝ人や、一生涯喜び笑はぬことなかるべく、喜性と云はるゝ者も、一生涯悲しまぬことなかるべし、怒性にして笑ひたる時は、其人の性は斷滅せりや、喜性にして悲しむ時は、其人の性は斷滅せりや、否々、性は生命絶わすして獨り亡滅せんもの

にあらず、昨日笑ひて今日悲しみ、今日樂しみて明日怒るの人あれば、隨て性は一日一日と變易するものと云はざるべからず、而かも一切この理なきなり。

故に曰はく喜怒哀樂は氣質にして、性にあらずと、去れど氣質にして、僻習久しきに至れば、漸く固定のそれの如く、抜くに易からざるせのとなる、人性は明鏡の如し、無色無點なる鏡面こそ、萬物を正確に反射し得べきも、赤色、青色、黒色の如き、色づきたる鏡面は、幾分かその自己の色彩に似寄りたるものとしてこれを映し、甚だしく濃厚なる色づきたる鏡面は、終に一切の物象を映寫する能力なきに至る。

人性の靈鏡また時に、喜怒哀樂てふ氣質の塗抹を受けて、事物の

當然の理を判明すべき能力を失ひ、喜ぶべくして怒り、怒るべくして喜ぶに至る、故に曰はく、喜怒哀楽の發せざる以前の靈物、これ即ち中と。

煩悶苦痛怨恨愁悲、苟も痛切に吾人の心中を攪亂する怪物を除かんとせば、須くこれ、情は起伏轉變して、常體あるものにあらず不斷永續の本性これ如何と、單々に究明すべし、たとへば泰山の巍乎として聳ゆること千古、而かも雲烟の日夕陰暗してその形貞を殊にすと雖も、泰山敢て雲烟の爲に、増減擴張するものにあらざる如く、紛々たる情懷の、吾人胸中を振盪すと雖も、本性これが爲めに何の變改なかるべきを悟るべし、即ち是れ激情濫發を豫防する工夫、兼ねて正當なる判斷に、事物の正理を辨明すべき、

最要喫緊の事たるなり。

中に大中至聖の心ありて、外に正逆鮮明なる標準と、修善排惡の勇氣とを兼ね時、過不及の患ひなく、物我一體、彼是の見解なく道理と道理と順應融和、これ所謂發而皆中節謂之和ものなり。

○子曰素隱行怪後世有述焉吾弗爲之矣。

(朱子は素の字を以て索の誤寫とすれど、素のまゝにても通ず敢て改むる要なかるべし)

教義の種類は多しと雖も、大別すれば、世教と世外教の二種たるべし、儒教の如きは前者に屬し、佛耶神道の如きは後者に屬す、

佛教は現世界を以て、始終の一部とし、未來と過去に對立す、耶蘇は過去世を説かずと雖も、未來世を説きて改過遷善の勸懲に資す、これその世外教と名づくる所以なり。

儒道の如きは則ち然らず、現世の人間たるものは、人間の道義を極め、これが實行に用ゆる全力の外、別に前世後世を説くの要なく、これを説きこれを求むるは、現世に不忠實なるものなりとの見解に依り、未だ生を知らず、焉んぞ死を知らんと訓戒して、敢て見るべからず、聞くを得ざる底の隱微なる説を求めず、これ現社會に心力を用ゆるの多き、彝倫を講究するに適切なる所以なり。然れども平道を厭ひて、怪疑の穿索に向はんとするは、普通人の愛好する所、各種宗教の祖師たるものは、巧妙に此の人情の弱點

に乗じて、神秘なる理義を述べ、奇蹟を稱道し、信徒を集合する材料とす、而して人の奇を好み妙を好むの情性は、常に隱秘なる地に素して、怪僻なる説を爲すものに左袒す。

然れども、如何なる山海の珍味にても、之れを喫せざれば些の美味を知らざる如く、道は人間の道にして、日常行道に没交渉ならんには、世道人心に裨補する所なきのみならず、却つて高妙なる口頭の理義に耽りて、實踐躬行を疎んずるの傾向を生ず、孔子の「社會教導を畢世の事業とせる孔子の、忍ぶ所に非ず、故に非常喜ぶべきの説を爲して、狼剛なる私慾に徇するの尤も惡むべきを知り、曰く、吾弗爲之矣」と。

世上多少の卓越する材識を抱懷して、而かも不遇なる地位に陥る

時は、耐忍の力量は何時しか消れて、奇を衒ひ異を弄し、極力自己を廣告せんとす、而して一面真理に背き世間を誤るもの滔々多くは是れなり、道を極むるは自己に在り、知ると知らざるの明不明は世人の責なり、我何すれぞ關せんてふ、剛勇なる精神は、道に深くして、義に篤きものに非らざれば能はず、故に次章に曰はく、君子依乎中庸ユウチュウ遯世不見知而不悔ラハヒ唯聖者能之ノミクスレナと。世の快々者流、道義の説を售りて、私腹を肥さんとする劣情漢の及ぶべき所に非ず、必ずや胸中確然たる信念を抱持し、信念と添ひて終始すれば、逆境に處して安然たる底の、換言すれば、お前さんとなら如何やうな苦勞も、添ふて苦勞がして見たい、と云ふべき知己を、自己心中に懐ける人のみこれを能くす、何ぞそれ光

風霽月欣慕すべき、洒落なる心事にあらずや。

○君子之道費而隱

學者たり、修養家たるものは、教訓と、教訓の由つて起る理法とを知ると共に、教訓は可成的平易にして、愚夫愚婦にも及ぼすべきを要し、理法は高妙精微にして、窮極を探知せざるべからざるを要すべし。

今夫れ忠なるべし、貞なるべしと教ゆるは平易なり、何の故に忠ならざるべからざるか、何の故に孝道は起るかに至つては、精微高妙なる理論あるべし。

天地永劫の理、循環不止の法、これを極むるの隱微精妙なるも、

期する所は、己れを完うし、世を救はんの平易なる歸點に過ぎず故に曰はく、君子之道造端乎夫婦及其至也察乎天地と。若し夫れ卑近なる實行を厭ひて、強ひて高遠行ひ難きの説を求むる者は、隱僻者流なり、唯教訓に盲從して、何等の理義を究明せざる者は俗輩なり、行道の廣くして、究理の精微なる、始めて君子人たるを得ん、故に曰く、費廣くして——隱——精微——と。

○君子素其位而行不願乎其外

抱懷せる主義にして、合ふときは出で、世を濟ひ、合はざれば退いて獨り己れを脣うず、白刃も踏むべく、深淵にも投すべし、唯々高潔なる主義は破るべからずと決する底の丈夫にして、始めて

君子の列に入るべし故に昨日廟堂に立つて、大政を議せし身の、一旦正義の貫徹せざるに至る時は、高踏勇退して田夫野人と居を列するの廣大なる心腸なかるべからず、吾人は唯だ道義に徇ず、大政を議するも道義の實行ならば、菜蔬に灌ぐも主義の實行なり紳縉を曳くと、襤褸を纏ふと、均しく主義の實行なれば、驕るべきに非ず、耻づべきに非ず。

地位を貪らんとし、職名を貪らんとし、其間多様の罪惡を構成する官吏教育者の夥しき現代に、吾人は特にこの宏量坦懷ある模範的人物を渴望せざるを得ず。

彼等の多くは、一度奏任の名を得れば、主義の行否に拘はらず、一度教諭の名を得れば、主義の行否に拘はらず、如何なる陋手段

を敢てしても、之れを失ふに忍びず、眷戀低回して退去の道を知らざるなり。

賄賂行はれ、諂諛風を成し、中傷讒害を敢てし、奸策狡智を弄してまでも、恐々然として唯々嚙ぢり附かんとする陋風、皆是れ自己の安すべき素地を顧みざるに起因する惡習にして、痛哭流涕に價せずや。

居易テキニ以俟ツテ命メものは君子なり、行險フテ以徼トム幸ルものは小人なり、名利は實なり、行道は主なり、主あつて實の價值生ず、實なき虚榮能く幾時をか支持するを得ん、人何ぞ實に勉むるの難くして、虚を趨ふの易きや。

グラチアン曰く、識見と勢力、即ち目と手となかるべからず、勇

氣なければ、智識も結果なきものなりと、王陽明曰く、人の胸中各々箇の聖人あり、只自信及ばず、都べて自ら埋倒了すと。

先聖後聖其の揆一なり、東賢西賢其の道符を合するが如し、道義に徇するものにして、自ら侮らざるものと云ふべく、虚榮に憧憬る、輩、即ち自己を傷破し、侮辱するものなり、傳に曰く、人必ず自ら侮りて後、人これを侮ると、戒むべき哉。

○自誠明謂之性自明誠謂之教誠則明矣明則誠矣

道を行ふものに一種あり、先天の氣質好良にして、周邊の境遇に拘はらず、單々として良心の答ひる行爲を排却し、唯善をこれ修

する時は、所謂物格しくして知ること至り、人情事變消長盛衰の理に明らか、萬有不可解の境を離れて、萬理整然森然の域に達す、何となれば、此種の人の心中には、研磨砥礪の自己を完全ならしむるを知り、兼ねてまた自己完全の義務なるを悟り、悟りたるまゝを誠實に行ふの氣概存すればなり、古來の所謂聖者、若しくは亞聖の稱を冠せらるゝものは、多くはこれ、故に曰く、生知安行は聖人の事と、所謂賢者とは、その修得の順序に於いて、これに異り、疑ひて問ひ、思ひて辯じ、その未知の理を刻々に究め、知ることの明かなるに至つては、誠實に服従せざることを極めて不快なるを感じ、實行漸積して、以て一點の邪曲を存せず、唯々至誠純一の地に慕進す、故に曰く、學知利行は賢人の事と。

富士の絶巔に上りて、一目瞭然に横徑縦路を見下すが如き、所謂自誠明なるものにして、横徑縦路を仔細に研究して後、漸く絶巔の光景に接するが如きは、所謂自明誠なるものなり、而かも其の絶巔に坐するに至つては、見る所即ち一、故に曰く、誠則明矣、明則誠矣と、或生而知之或學而知之或困而知之、至其知之之則一也。

○誠者物之終始不誠無物

誤解する勿れ、誠は永久固着のもの、經書に所謂誠とは、變易循環の理を指すものにして、進化と云ひ、運行と云ひ、一切誠の力ならざるはなし、換言すれば事物が遇合する當面の理法に順應

する力を云ふなり、卵の孵化して、蛹となり、蛾となる、皆是れ誠なり。

卵たるべきに當つて卵たらずば、後日の蛹なきなり、蛹たるべきに當つて蛹たらずば、後日の蛾なきなり、無限永續の物質は、常に刻々進化の誠によりて形成せらる、兒童たるに當つて、兒童たる理を盡し得ずば、父兄たるに至つて、父兄たる價值なく、新婦たるに當つて、新婦たる道なくば、後日主婦たるの權能なし。

當面の理に順化して、生々息々極り、きものにして、永久の進程を辿るに足る、進化論者の祖ダルウインの如き、また誠者物之終始を、物質上より説述したるものにして、陸象山の所謂、道理只是眼前之道理、學至聖賢亦只是眼前之道理と云へる、ま

た至誠無息の意を側面より道破したるもの、されば人よ、自己が現在の地位に適應にしたる正理を進行するを、誠とは云ふぞ、子道を盡さざる子を持つてば、親ありて親なく、子ありて子なきなり、臣道を行はざる臣を持たば、君ありて君なく、臣ありて臣なし、不誠無物の意義、明また瞭、唯小人一時を苟且する精神に驅られ、糊塗儉安自己分上を顧みずして、徒らに意馬心猿の跳跟に任かす、聖代にして聖代を知らず、文明にして文明の澤に接せざる民衆の多き所以なり。

論語の部 二十六章

○子曰學而時習之不亦說乎

黄卷赤軸、千部の書冊を讀破すと雖も、これが實習を経ざれば正確なる智識とならず、隨て學問の趣味なく、進取向上の氣力、由つて起るべきなし、只見て空論、故に學ぶ所は、必ず實經驗を以て正確に試験し、澁滯遲疑なくして、始めて學術の効果を知覺し湧然として快心生ず。

然れども實習には、時機ありて存す、時機を待たずして、行はんとすれば妄動にして、時機を逸して行はんとすれば徒勞なり、時の字義大なるかな。

○有朋自遠方來不亦樂乎

學程進捗して、實習漸く熟し、言貌視聽、一切の行動が、整然人の模範たるに至つては、桃李の言はざれども下自ら蹊を爲すのたとへ、自ら我は先生なりと售らすとも、具眼の人、道の遠きを厭はずして、來つて道を問ひ、業を研く、學者修養家にして、此に至るもの元より自己進修の力なりと雖も、抑もまた順境たるの天福なり、而じて若しその逆境に立ち、反流に抗するの覺悟に至つては、請ふこれを次章に問へ。

○人不知而不愠不亦君子乎

一切の人が修養に志す所以の理は、自己生涯をして尤も有功に、尤も快樂に、而して尤も安心に過ごさんとして、確たる信念を求むるに外ならず。

有徳の人にして、地位を得名望を得るは、自然の常法なり、然れども、肥料多く、耕耘宜しき作地にして、時に凶作あるを免れざるが如く、道義の進修、深く厚く、當然顯揚すべき人物の却つて埋没して人に知らざるあるを免れず。

凶作必ずしも作地の眞價を動かさず、名聲の有無必ずしも人格の高下を表はさざるを知らば、人不知而不愠の、眞の道義たることを了解し得べし。

然れども名譽慾は、人間性慾の大なるものにして、素養深博にし

て、信念確立の人にあらざれば、斯程勉めて、斯程名なきに、不平の感なき能はず、不平の感ある所、邪私の漸く萌さんとする所此の間に處し平然たる大丈夫こそ、眞成修養圓熟の君子にして、所謂遯世不見知而不悔唯聖者能之と云ふべし。

故に士は學ばざるべからず、學びては實習せざるべからず、而して人に慕はるゝ順境には楽しみ、人の知らざる逆境には自得して己れを能くし、外物の如何によりて、自己の靈性を動かさるゝことなく、然る後、仁を求めて仁を得、安心を求めて安心を得たりと云ふべし。

○曾子曰吾日三省吾身爲人謀而不忠乎與朋

友交而不信乎傳不習乎

へ朱子は傳不習乎とすれど、余は文法上、傳の下に而の字なく、且意味に於いても、如上の句讀を正しからんと思ふ)

自己の全力を盡し、自己を欺かざるもの、之を忠と云ひ、他に欺かず、契約を履行し、履行し得ずと豫期する事件を契約せざることを信と云ふ。

事件の自己身上に關係して、痛切なる影響を受くべくんば、爲我の情ある人間として、誰れか深切熱心に探究して、處理の方法を、尤も有力に尤も功果あらしめんと勉めざらん。

然れども一旦事の他人身上に限るを見るや、これが相談を受くる

とき、これが處決を托せらるゝ時、稍もすれば、全力を盡すの愚なるが如く思惟し、心にもなき諛言を以て、一時の迎合を求め、或は永遠の幸福を思料せざる、又はたとひ知これに及ぶも、人の事なり、左程に盡さずもがたと捨て置くが如きは、苟も道義に徇せんとするもの、取るべきにあらず、何となれば、社會は組織せられたる一團體にして、團體中一分の凶事不合理存在すれば、随つて自己の周邊のそれ丈け、凶事不合理に犯蝕せらるゝこと、恰も一椀の清水に一滴の墨汁を混ずれば、全部分に透明清淨を失ふか如しと感ずればなり。

是れその、人の爲に謀つて忠ならず、朋友と交つて信ならざるの尤も忌むべく畏るべき所以なり、狡獪なる精神、奸惡なる意思を

抱懐せる時は、單に人のみにあらず、朋友のみにあらず、一家庭内に於いて、各々秘密公言すべからざる策略を運用し、波瀾茲に生じ、不幸茲に來る、公明正大なる心事、洒々落落の氣風、眞にこれ自己自身をして、苦を抜き樂に至らしむる、點鐵成金の藥料と云ふべし。

一理を教へ、一技を傳へんと欲するものは、必ず先づ自らこれを實習したる後ならざるべからず、耳に聞きたる訓言、目に見たる書義、直ちに以て喋々他に教ゆるが如き、これを口耳三寸の學と云ひ、道聽塗説の人と云ふ。

地味の如何、氣候の如何に相違ある時、如何に善良なる西洋農學説も、直ちに本邦に實施して好良なる結果を得べからず、東京市

民の子弟が要求する常識は、必ずしも、山間海陬の樵夫漁人の子弟が要求する常識と、均一並行すべからず、文部省編纂の教科書の如き、時に拆衷取捨する手加減の必要なるは云ふを峻たず、唯々省令に服従して、能事了れりと思惟するが如きは、所謂傳ルチハ不習ルチハものこして、夫の人の子を賊ふものと云ふべし。

説き來れば、漸く繁雜なるが如しと雖も、守るべきは一のみ、曰く、自他何れに關するを問はず、現下に當れる問題に向つて、周到なる用意、實切なる行爲を拂ふべきこれなり。

○子曰チ溫ニ故ヲ而レ知ラ新ヲ可シ以テ爲ル師ト矣

過去數千年に於ける歴史を尋究して、その風俗人情舊慣の、如何

なる徑路を辿り來りしかを推度するは、子弟教養上極めて必要な事にして、以て此の人種が、如何なる事頂には感染し易きか、改進の度程の如何に緩なりや急なりや、併せてはまた、かくくの現狀はこれを既往に參稽するに、必ずかくくの變動を來すべく、これが勸誘の法は如何、これが匡正の道は如何と觀測し、實施し得るの效能あり。

而して一面斬新なる學說技藝の研究に怠らず、常に世上一般の見解より進むこと數歩なるもの、はじめて教育者たるの價值あり。新を好み、舊を捨つるは、普遍的の人情なればにや、スペンサー、ベイユンの文學を知りて、紫氏、謠曲に通せざるもの、ヘルバルト、の教育學を熟讀して、益軒、鳩巢の教法を知らざるもの、漸

く多きは、専門教育、技藝教育には則ち可なり、苟も國民精神を發揚すべき、普通教育者としては斷じて不可なり。要するに、來路を知り、往路を知り、現在止まる處の地域に熟するものは、始めて正確なる案内者と云ふべし、固陋なる漢學者、因循なる國學者の多くは、來路を顧みて、往路に通せず、輕銳なる西洋學者、浮薄なる教育者は、來路を忘れて、往路にあせる、而かもその弊たるは一なり。

○子曰繪事後素^{ニスニ}

運筆の妙、色彩の美を極むるも、斑々たる汚點の印せる、絹紙の上に描かれたる繪畫は、遂に最上逸品たる資格なし、故に繪畫の

技に精なるものは、描かんとする絹紙の精白なるものを先にし、繪事は然る後ならざるべからず。

曾て余は、茶道の宗匠に爐開きなればとて招かれたることあり、好みの茶室は敷寄を疑し、寶鼎珍釜香合茶杓の末に至る迄で、凡べて是れ逸品奇物。

廳で盛装せる娘子は、袱紗のこなしを終り、茶末を投せんとせる殺那、手の振ひたるにや、茶匙躍りて粉末塵亂、忽ちにして赤める顔は、走りて障屏の後に掩はれぬ、過失は過失なり、責めて沈着に後片附けてが那と思ひしか。

それ茶道の意たる、心思を靜整し、舉動を沈着にするを本意とす然るに技藝の末に走りて、徒らに此の醜陋に陥るは、絹紙の先に

して、繪事の後なるを忘れたるなり。

進物は敬意を表はすを主とす、敬意なくして千金を人に致すも、禮の大本に缺くる所あり、虚禮是れのみ、感化事業は、誠意を主とす、誠意なくして技術を是れ論ずるは、感化の大本に缺くる所あり、偽教育者は是れのみ。

慈善は同情を主とす、同情なくして、名を是れ釣らんとする寄附行爲は、慈善の大本に缺くる所あり、偽善是れのみ。

學問は實行に資するを主とす、實行なくして書義を是れ釋ぬるは學問の大本に缺くる所あり、空學是れのみ、看來れば何ぞ絹紙を精白ならしめずして、運筆彩色にのみ腐心する人の多きや。

○子曰君子喻於義小人喻於利

昔し、顔淵水飴を見て、以て民衆を養ふべきを思ひ、盜跖水飴を見て、以て闕居に塗りて、戸を開くに音たてざるを得んと思ふ。均しく是れ水飴にして、君子は義に用ゐんとし、小人は惡に用ゐんとす、豈獨り利に喩るのみならんや、故に孟子曰く、欲^{スレバ}知^ル舜與^レ跖之分^ヲ惟^ニ利^ヲ與^レ善之間^ニ而已^ト矣^ト。

科學上の智識を應用するも亦た然り、法學に通じて、冤枉を救ひ正道を擁護せんとするある、私利を營みて、法網を免れんとするあり、化學色拔きの説を聞きて、廢物利用に資し、一般の生産を助けんとするあり、帳簿を改記し、金員を竊取せんとするあり。吾人が一般の事物を看、一切説話を聞きて、感動し、應用せんとする一念の動く時は、最も注意すべき瞬間にして、私利以て他を

害せんとする應用法にはあらざるか、吾人が現に應用し、模倣せんとする方法は、吾人が最も崇敬する先輩に對して、明白に告白し得る正大なるものたり得るやを、考思再三せざるべからず、然らずんば一念の微、千里の差の依つて生ずる所、猶ほ一點の火氣が、延燒萬戸に亘り得るが如し。

○子曰^ク知^ル之^ヲ者^ハ不^レ如^ク好^ム之^ヲ者^ハ好^ム之^ヲ者^ハ不^レ如^ク樂^ム之^ヲ者^ハ盡^ニ爾^ニとして動き、而かも自己現在の勞役が、社會に對し、何等の影響を興ふるや、はた人生として、何程の價值ありや、何に由つて動き得るか、何が爲めに動かざるべからざるかを、知らず否嘗て顧みだにせざるものは小人なり、愚民なり、言論の以外なり。

人に人の道あり、世に世の道あり、天地永劫に天地永劫の道あるを聞き、之れを知ると雖も、眼前營々の小業務に追迫せられ、好んでこれを講究せざるものは、未だ以て大知と云ふべからず。好んで之れを講究すと雖も、未だ道理の本源に逢着せず、唯々説話を聞き、書籍に對するに當つてのみ、これが穿鑿に耽るの輩、知は則ち知なりと雖も、行住坐臥道義の踐履實行に盡さず、未だ以て大人君子たるの境域を望むべからざるなり。必ずや、之れを知り、之れを好み、味ふことの深くして、行ふことの厚く、道を體して、自己と別物たらず、自己即ち道、道即ち自己、一舉一動必ず之れと離れず、道の爲めに貧にして患へず、道に由つて富みて侈らず、貴賤尊卑、悠然として自得せざることを

なきに至つて樂みて之れを行ふものと云ふべし。

○子曰、知者樂水、仁者樂山、知者動、仁者靜、知者樂仁者壽。

(知者樂水、仁者樂山、句讀、從來水ヲ樂シ、山ヲ樂シム、とすれども、仁者にして水を樂しまざるにあらず、知者にして山を樂しまざるにも非ず、故に余は、山水の二字を以て、實在名詞とせず、形容詞とするの、斷じて可なるを主張す)

葛藤百難の間に、明快なる判斷を與へて、即刻に處理し、行々嘗て惑はざるは知者なり、恐怖の情は常に自己力量に過ぎたる事の來れるか、來るべしと豫期する時に湧出すると同時に、一旦之れ

に當り得べしてふ、確然たる方便信念の來る時は、勇氣勃然早くその事の來れかし、偉大なる我が力量を表現し呉れんと期待するに至るは、何人もその經驗に味ひたる事實なるべし、萬境に不感なる知者は、周流滯るなき水の如き明智を有するが故に、進んで活動流行せんことを求め、その豫期することの正中するに當つては、快氣浩然云ふべからざる樂しに接觸す、故に曰はく、知者の樂は水、知者は動、知者は樂しむと。

起伏千辛の裡に、泰然たる宏量を支持し、自然の理法に従ひて、悠々嘗て憂へざるは仁者なり、故に仁者は事を迎へず、事を避けず、難きを先にして獲ることを後にし、事件の去來に由つて、不動の心根を變せらるゝことなく、常不斷、物を追はず事を求めず

而して終始超然として、無限の活泉を心中に養ふ、故に曰く、仁者の樂は山、仁者は靜なり、仁者は壽しと。

○子曰^ク仁遠乎哉^{カラシヤ}我欲^{セバ}仁斯^ニ仁至^ル矣

人の道を爲して人に遠きは、寧ぞそれ道たるにあらんや、實に道は邇きにあり、而して人これを遠きに求む、何ぞ誤れるの甚だしき、仁は人心の至徳元より腔子裏に在つて存す、君々、臣々、父々、子々、夫々、婦々、これのみ。

固有の靈性、敢て一點他より假り來つて、注滴するの勞あるにあらず、唯々人の思はざるのみ、欲すれば斯に仁至る、子道を盡さんと欲する時、即ち子たるの仁なり、師道を守らんと欲する瞬間

即ち師たるの仁なり、一念萬境を形成し顯示す、佛教これを説いて、眞如實相、眞實如相と云ふ、他を虐げんとする時、忽ち心頭角を生じて怪鬼となり、邪利を貪らんとする時、忽ち心頭手多くして百足虫となり、不正なる怨恨、不義なる耽樂、忽ち人をして夜叉の形相を示さしむ。

故に苟も仁に志す時は惡なく、一善を求めんとする一念は、即ち善にして、更に何の不善か心中に滯留すべき、仁を欲するの念頭は即ちに仁思へよや人。

○子曰恭而無禮則勞慎而無禮則憊勇而無禮則亂直而無禮則絞

禮の中なり、動容周旋行事の一切をして、過不及なく中道に歸せしむるものなり、謙遜は禮なり、過ぎては卑窟となり、追従となる、及ばずしては、傲慢となり僭上となる、唯に他に對して而かく度を失するのみならず、自己心中に泰然たる裁判力を失ふなり。恭順の意深くして、これを制する中道を得ずんば、齟々として晏如の思ひなく、勞苦心に蒸れて、急迫言貌に溢る、慎謹の心ありて、宜しき表現の中道を知らずば、恐怖の情となり、翼翼として悠然の態なく、勇猛驕進の氣に富みて、これを裁するに中道を以てせずんば、則ち亂動人を害し、己れを傷く、正直行々焉として而かも中道に叶はざる時は、節文なくして、木強漢となり終る。禮は遺聖制度人情の同一に是認せしより定まりたる、粹の結晶な

り、對人關係の樞機にして、社會組織の大本、學ぶによりて知り行ふによりて明らかなり、故に人たるもの、禮を行はざるべからず、行はんとすれば、學ばざるべからず、故に曰く、仁を好んで學を好まざれば、其弊や愚、知を好んで學を好まざれば、其弊や蕩、信を好んで學を好まざれば、其弊や賊、直を好んで學を好まざれば、其弊や絞、勇を好んで學を好まざれば、其弊や亂、剛を好んで學を好まずんば、其弊や狂。と而かも、繪事後素の訓戒を忘れ、誠意敬慎の實なくして、形と式とに拘々泥々たるは、虚禮なり、俗式なり、大人君子の取らざる所なるを忘るべからず。

○子曰狂而不直ニシテナラニシテ侗而不愿トシテナラニシテ慥トシテ々而不信バナラニシテ吾不知

之矣

蹠齧奮躍の弊ある馬は、其の足疾やきの利あり、雜草繁蒔の病ある田地は、膏腴肥潤の良野たるべき利あり、天の物を生ずる、至長純粹のもの稀にして、一利一病のもの常に多し、故に此の病ありと雖も、此の利ある時は、猶ほ取るべきあり、故に君子は全きを人に求めず、適材適所の言ある所以なり。

唯その病みありて利なき、これを棄才廢物と云ふ、狂は所謂一克者なり、其の長所たる直にして枉げざるにあり、侗は無知無才なり、其の長所たる愿誠偽らざるにあり、慥々は無能活動なきの人なり、其の長所たる信實無妄なるにあり、此の數者にして、此の

長所を缺かば、稻にして米なく、蔓にして果實なきが如く、漫然國土を埋めて、これに報ゆる所なきもの、孔子故に曰く、吾不知^レ之^レ矣^ト。

○子絶^ッ四母^ッ意母^ッ必母^ッ固母^ッ我

私意ありて明裁公断を闕き、期必ありて縦觀横覽の周到を闕き、固執澁滯して流通自在の活動なく、我見充溢して邪曲増大す。當面正規理法に循ひて、以て爲すべくば爲し、退くべくば退き、只管天理の至極に應じて、廣土民衆富貴榮譽、君子之れを欲すれども、楽しむ所は別に存する概ありて、外來の物質事誼が、自己天分に一點の増減をもなし能はざる妙理を覺醒し、事業に従事し

て、事業に役せられざるもの、眞の驚天動地事に堪へ能ふべきなり。

然れども誤解することなかれ、絶四の意味が、徒らに志を立つることなきに均しと。

曾子曰く、士不可^ラ以^テ不^ニ弘毅^ナ任重^ク而道遠^シ仁以^テ爲^ニ己任^ガ不^ニ亦重^ク乎死^シ而後已^ム不^ニ亦遠^ク乎と。然り丈夫兒の世に出づる必要すや、弘寛なる胸襟に、一切の些事を苦しまず、剛毅なる氣力に、百難を排除し、重任を負擔し、遠道を行き、予は天民之先覺者なり、予斯道を以て斯民を覺らしめんとす、予これを覺らしむるに非ずして誰ぞや、てふ高潔遠大なる、伊尹底の志なかるべからず。志は絶巔なり、意必固我は中道に横はれる、荆榛崑石なり、荆榛

崑石を必ず超越せんと欲するの愚は、寧ろ迂回して平坦なる途を
辿るの賢なるに如かず。

如何に光輝あり榮譽あるも、この志と相合せざる時は、着手する
丈け夫れ丈けの、空しき時日を志に非らざるに費消す、何ぞ獨り
玩物喪志の恐るべきのみならんや。

私意を遂行せんとし、必ず地位を求めんと務め、現在に固着澁滯
して、高踏勇退の責を知らず、我見を以て輿論に戦はんとする時
賄賂行はれ、買收行はる、醜怪なる行動の源泉は、多く端を此の
處に發す、謹まざるべけんや。

○子在川上曰逝者如斯夫不舍晝夜

流行は道なり、固滯は偏なり、道にあらざるなり、至誠息むなく
して、萬物を生息し、日月交代し、寒暑往來し、曾て誤ることな
し、天道健なり、君子これを則つて、自彊不息、此の故に、今の
世に處して古の道に固滯し、宇宙の理法中にあつて、一方の學術
に執着し、當面を論せず、現下を議せず、只管に一を執りて萬境
を制せんとする、皆これ中庸君子之道に非ず。

身體は一なり、父母に對しては子となり、君に對しては臣となり
妻子に對しては夫となり父となり、各々其の道を全うすること、
水の晝夜交代變易して、而かも低處に就くてふ本然の性を失はず
自然の理法を盡して、遺憾なきが如し。

此の故に以て知るべくして、知らざるは怠なり、性にあらざるな

り、以て行ふべくして、行はざるは惰なり、性にあらざるなり、博く學び、審かに問ひ、明かに辨じ、慎んで思ひ、篤く行ふ、者はじめてよく自強不息の君子人と云ふべし。

○子曰非禮勿視非禮勿聽非禮勿言非禮勿動

非禮は大正至公の道にあらず、これを視聽言動に避くるは元より正人の望む所、而かも味ふべし、これを言動せざるは則ち得んもこれを視聽するなきは困難ならずや、視て而る後非禮なるを知り聽きて而る後非禮なるを知るに非ずや。

然らば則ち絶對に非禮を視聽せざるは、不可能なるか、曰く否、視聽は見聞と字義を異にし、意識を以て穿鑿的に、視察し聽斷た

るを云ふ。

視聽の起る所、必ずこれに趣味を持つてふ起因あるなり、好んで視、好んで聽くに至りて、他人の非禮は、直ちに自己の罪惡を媒す、然らずして、偶然見、忽然に聞き、これを心に留めず、意に介せずば、非禮は對岸の火災と一般、自己行に一點の汚斑をも印せざるなり、何ぞこれを患へん。

然れども、法語の言は耳に悖ひ、非禮の辭は心に泌み易し、平常の修練深厚なるにあらざれば、淫而不滓底の堅固なる心膽は得べからず、要は獨を慎むのみ、睹ざるに戒慎し、聽かざるに恐懼するのみ。

勢利紛華不近者爲潔近之而不染者爲尤潔智械機巧不

知者爲高知之而不用者爲尤高也、還初道人喝破し得てよし、大隱々於市の宏懷は、山林に逸居して、風流を氣取る輩の知らざる所、非禮を見聞して、而かも視聽せざる高潔なる心事の養成は、特に活動社會に處するの人に必要なるを覺ゆ。

○父爲子隱子爲父隱直在其中

公明正大とは必ずしも、實況を實況に顯はすの謂にあらず、理は公なり一般的なり、事は局部的なり、君を諫むべきは理なり、諫むる事は局部的なり、故に公表すべからず、夫婦相和するは理なり、一般的なり、相和するの事は、局部的なり、公表するの要なし、唯その行事が後日自然に現はるゝも、恥づべきなく怖るべき

なきもの、これを公明正大と云ふ。

父子の間は愛を以て立つ、故に善を責めむ、善を責むれば離る、離るれば不祥これより大なるなし、子たる身の、父の悪事を顯揚するは、自己を潔うせんとして、元を忘れたるもの、所謂全きを求めて毀を得るものたらずんばならず。

父に不善ある、これを秘して顯はさず、而して内に蒸々七めて奸に格らしめざるの誠を盡し、よくこれを化するに努むるもの、始めて與に人道を語るべきのみ。

○子曰君子和而不同小人同而不和

和は和順なり、同は雷同なり、君子は正義正道の在る所に和順賛

成して、理非曲直を論せずして、雷同附和することなし、小人は理非曲直を論せずして、雷同附和して、正義正道に和順賛同することなし。

今の世一團體を作り、堂々論議を馳するもの、多くは黨論にして輿論あることなし、自派自黨に利ある時は僻邪曲枉を顧みず、扼腕飛沫、滔々として饒舌を費す、公議の場裡に醜穢の絶わざる所以。

君子の天下に於ける適なく莫なく、唯々義と與に比すの概あるものは、仇讐と恩人との別を以て、其言に賛否の別を生ずべからず言に由つて人を取らず、人に依つて言を捨てざるの快心事は、善を好むこと色を好むが如きもの、常に味ふなり。

○子曰愛之能勿勞乎忠焉能勿誨乎

人倫の交際には、必ずや愛敬の道を備へざるべからず、愛するのみにして、勞せしむることなきは、被愛者をして、全き道を具せしむる所以にあらず、唯忠實に上者の命を之れ守るは、妾婦の道にして、正人君に事ふる所以にあらず、孟の所謂、食而弗愛豕交之也愛而不敬獸畜之也、と同一般。

故に上たる者は下を愛し、これを誨諭役勞し、其の責を全うせしむる、是を眞の愛と云ひ、下たるものは上に忠し、時に犯して諫諭する所ある、眞の敬と云ふべし。

○子曰君子上達小人下達

義と利、理と慾、正に是れ君子小人の分水嶺にして、君子の心事たる公明正大、天理の當然に徇ひ、大義の正法を行ひ、一點邪曲を其間に混ゆるを欲せず、過ちてこれある時は、憚らずしてこれを改め、自己良心に恥ぢず、他の見聞に怖れざるを勉め、忠信を主とし、剛毅直方の力を以て、理義精粹の事に盡し、遂に極至究竟の高潔なる境界に入る、故に曰く上達。

日出で、汝々として、唯利を之れ圖り、人欲の遂行に全力を傾注し、如何にせば名聲を博せん、如何にせば、利潤を得んと、思考する所、畫策する所、隣人を飢ねしめて患へず、親戚を凍ねしめて、意に介せず、違々茫々として、敢て慾界の奴隸となる、故に曰く、下達、その爲さるる所なきの惡を云ふなり。

○立則見其參於前也、在輿則見其倚於衡、夫然後行。

道は須臾も離るべからず、離れ得るものは道にあらず、故に須臾の間も知りつゝ、道に背く者は、常に恐怖の情を抱いて、その露現せんことを思ふ、これ離れ得ざる證跡なり、造次顛沛の間、周旋動容の中、常に道の道を全うせんと勉むるものは、所謂、物格而後知至の境に入り、道義行はれ、計策遂ぐ。

凡そ人間道德の教たる、これを實行して効力を生ず、實行は多くの場合情の力を用ゐざるべからず、理のみ知のみ、これを解するも、情に訴へて力を得るに非ずんば、これが現實を期しがたし。

唯々知るのみにては、客在の理想、たるに止まる、故に、斯の如き場合は、身を殺さざるべからず、と理解するのみにて、一身を抛つは、君子者に非ずはかたし、情に驅られて、命脈を絶つは、愚婦愚夫のなほよくする所、信仰の理解より強力なる所以なり。故に立てる時、その前に、與にある時、その衡に、常に一種犯すべからざる監督者あるが如く心得るものにして、始めてよく、終始を道と與にし、能く行はるゝに至るなり。

現下の徳育に實行の現はれかたき所以は、之れを注入して智識を與ふるを主とし、根本問題たる、行はざれば忍びず、行ふに勝れず、てふ強烈なる情の養成を等閑せるに起因せずんばならず、これ口頭倫理家の多き所以なり。

○子曰可與言而不與之言失人不可與言而與之言失言知者不失人亦不失言。

人の己れを知らざるを患へず、人を知らざるを患ふ、これ修養家の本領なり、與に言ふに足る人物に對しながら、云はずんば、その交るによき人を失ひ、與に語るに足らざるものを捉へて、百千言を費すも、終に無用の言たるに終る、共に知者のことにあらず。唯々空論に巧みなるものあり、故に論の篤きにのみ與みすべからず、言ある者、必ずしも徳あらざればなり、循々として、法語の言を聴くと雖も、その實行たる常に之れに反するもの、これまた共に云ふに足らざるの人なり。

○子曰君子疾ハクム没世シテ而名不稱セラレ焉

君子の志す所は、道の實行にあり、名に徇じ、利に徇ずるは、その卑しむ所、然らば孔子何の爲に、名の稱せられざるを疾くむか。孔子の所謂名は、實の實にして、實徳より來るものこれなり、何を虚名空譽の謂ならんや、何を以てか之れを證する、曰く、君子去仁ツテ惡乎成名カ、と云へる語あるはこれなり。孟子この意を敷衍して、辨問過情君子恥之レ、と情は實なり、實徳なくして、空譽の高きは君子の恥づる所、故に王陽明は、稱の字を、カナフと訓じ、没世シテ而名不稱セラレ、と讀めるその眞に庶幾からんか。

○子曰人能弘ム道非道弘ム人

立つ道あつて立ち、行く道あつて行き、食ふ道あつて食ひ、乃至は、坐作進退、各々その道なくしては、一事を遂げず、一舉を行じがたし、人その道中に生息して、而かもその道を自覺せざること、恰も魚水中にあつて、水を知らざるが如し、故に曰く、百姓は日に用ゐて、之れを知らず、と、不識ハ廬山眞面目ヲ、祇緣ズ身在此山中ニ、と蘇東坡の詩眞に然り、故に唯々道界茫茫幾千萬里中、その自覺せるものゝみ、道を稱し、道を行じ、これを筆舌に表はし、これを、古今西東に恢擲せず、千言萬語も唯々その道の平坦々を説くに過ぎず、知らざる

ものは、識らずして用ゐ、仁者はこれを仁と呼び、知者はこれを
知と名づけ、老莊は虚無と云ひ、陽明は良知と云ふ、皆これ一個
の道、其人ありて其名殊に、而かも道の人を弘むるにはあらず、
人の道を弘うしたるなり。

今の世に、今の道なかるべからず、日本自ら日本に處する道のり
然かもその人存せざれば、其事廢して行はれず、誰れかよく、自
覺して道を弘むるの任に堪ふる者ぞ。

○子曰知及之仁不能守之雖得之必失之

たとへば猶ほ、弓を射るものゝ如し、弓を射るものは、略ひを定
むるの巧なかるべからず、矢を達せしむるの力なかるべからず、

狙ふことの巧妙なるも、その矢の達する力なくば、その狙ひたる
徒勞にして、的中之技を肆ふるを得ず、知は狙ひなり、巧みなり
と云へども、その知る所に直往邁進する力なくんば、空知なり實
効なきなり、仁は力なり、故にこれを以て、善を遂げ、惡を去る
の守たらしめざるべからず、此意味に於いて、知は理知なり、仁
は感情なるに庶幾し、三者併用して、知行合一、體用一源の妙境
に入る。

也與 ○子曰色厲而内荏譬諸小人其猶穿窬之盜也

虚飾を事とし、言論を壯にし、而かも實行の伴はざる人は、常に

心事行事の、他人に洞見せられんことを恐れ、恰も細民の、善良温順を装ひつゝ、暮夜出で、人の墻壁を窺ひ、財寶を盗まんとする、穿窬者(コソ盗人)流と一般。
故に曰く、論篤是與君子者乎色莊者乎、と、又曰く、郷原、徳之賊也、と、口に正直正義を説き、眞實竟究の道を體せず、世評人言をのみ顧みて、徒らに聲譽を馳せんと領するものは郷原なり、一郷かくの如き、聲望家ある時は、郷人これを模範とし、以爲らく、人となりては此の如くにして足ると、眞誠なる道義の探究、果決なる行徳の遂行に、一意専念なる人を出さざるに至る徳の賊たる所以なり、而して今の世、この厭ふべき郷原だにまた得易からず噫。

○子曰不知命無以爲君子

栽培供肥は農民の正業なり、然れども豊凶潤迫は、天來の命なり拒むべからず、而かもその水旱風雨の災あるがために、栽培供肥を等閑にするは、忠實なる農民にあらず、仁義恭敬は君子之正道たり、然れども吉凶禍福は、天來の命なり、免るべからず、而かも凶變禍災あるが爲に、仁義恭敬を忽諸にするは、方正なる君子にあらず。

境遇の賦與は天にあり命にあり、己が責にあらず、修善の行爲は己にあり身にあり、禍福を以て志を變ずべからざるは、人事を盡して天命を待つもの、獨りよくする所、然らずば、その利なき、

に倦怠して、自暴自棄となり、或は奸邪私曲に流る、君子固より窮す、小人は窮すれば濫すの言ある所以。

孟子の所謂、何必曰利亦有仁義而已矣、とは即ち是れ、人の生るゝや直し、故に誠を行ふは、人の道にして、道に従ふは、幸福を得る方法たらずんばならず、故に道を修めて、幸福を得るは常法なり、道を修めて凶災に逢ふは變道なり、變あるがために、常を捨つる、これなほ、水旱風雨を虞つて、耕作を廢するが如し。

孟子の部 十九章

○權^{アリラル}然後知^リ輕^チ重^チ度^{アリテ}然後知^ル長^ク短^ク物^ナ皆然^リ心^チ爲^ス甚^{シト}

物の輕重を知らんと欲するものは、必ずや權衡なかるべからず、品の大小長短を知らんと欲すれば、必ずや尺度なかるべからず、權衡尺度正しくして、品物大小長短始めて明かなり。

今夫れ、一朝の愛に溺れて、十年の交を捨て、一旦の慾に迷ひて再生の恩を忘るゝもの、或は己れの欲せざる所を人に施し、或は己れの好む所を人に頒たず、良知の權衡、良能の尺度は、棄て顧みず、安んぞよく人倫禮常の大小輕重を知らんや。

過は惡なり、不及は罪なり、行爲をして善良ならしめんとせば、

過不及なきを要せざるべからず、過不及なきを要せば、心に權衡尺度の正しきものなかるべからず、禽獸を愛育して、而かも愛妻子に及ばざるは、權衡なきなり、鬼神を敬仰して、而かも敬仰の父兄に及ばざるは、尺度なきなり、これ類推することなきものにして、若し類推忖度の宜しき時は、人みな以て善良の君子たるを得ん、何が故ぞ、人の生るゝや、その親を慕ひ、長じてやその上者を敬す、これを擴充して、仁義勝げて行ふべからざるに至るべければなり。

○以大事小者樂天者也以小事大者畏天者也

大小は量なり、貴賤は位なり、位は先天にして、量は後天なり、

君子は後天を以て、先天を破らず、羈府は領する所、朝廷に超ゆるも、而かも朝廷を敬するの意を缺くべからず、智識に於いて、學徳に於いて、その量は遙かに父母に超ゆるも、子はこれを以て親に事ふるの道を缺くべからず、これ所謂以大事小者也、樂天者也。

位階同一なるものは、大を長とし、小を従とす、これ天下の通義なり、儕輩の大なるものに事へざるは、天理に背戾するなり、同盟の國、その大なるものは、常に小なるものに先んず、國土小に民力小に、而かも猶ほ大に事ふるを知らざれば災その國に及ぶ、而かも思へ、國は唯その土地の大小を以て、直ちにその國力の大小を定むべからず、人はその富強の多少を以て、直ちにその人格

過不及なきを要せざるべからず、過不及なきを要せば、心に權衡尺度の正しきものなかるべからず、禽獸を愛育して、而かも愛妻子に及ばざるは、權衡なきなり、鬼神を敬仰して、而かも敬仰の父兄に及ばざるは、尺度なきなり、これ類推することなきものにして、若し類推付度の宜しき時は、人みな以て善良の君子たるを得ん、何が故ぞ、人の生るゝや、その親を慕ひ、長じてやその上者を敬す、これを擴充して、仁義勝つて行ふべからざるに至るべければなり。

○以大^チ事^{フル}小^ニ者^ハ樂^ム天^ヲ者也、以小^チ事^{フル}大^ニ者^ハ畏^ル天^ヲ者也

大小は量なり、貴賤は位なり、位は先天にして、量は後天なり、

君子は後天を以て、先天を破らず、霸府は領する所、朝廷に超ゆるも、而かも朝廷を敬するの意を缺くべからず、智識に於いて、學徳に於いて、その量は遙かに父母に超ゆるも、子はこれを以て親に事ふるの道を缺くべからず、これ所謂以大^チ事^{フル}小^ニ者也、樂^ム天^ヲ者也。

位階同一なるものは、大を長とし、小を従とす、これ天下の通義なり、儕輩の大なるものに事へざるは、天理に背戾するなり、同盟の國、その大なるものは、常に小なるものに先んず、國土小に民力小に、而かも猶ほ大に事ふるを知らざれば災その國に及ぶ、而かも思へ、國は唯その土地の大小を以て、直ちにその國力の大を定むべからず、人はその富強の多少を以て、直ちにその人格

の大小を定むべからざることを。

且つ思へ、事ふるは、諂諛面従と異なることを、故に若し、上長者にして過失悖義 犯す時は、當面の時勢と事理を參酌して、これが匡正改善を促すものこそ、真によく事ふるものと云ふべきなり。公明正大の心事、行ふて弊なく、繼いで害なく、人聞きて恥ぢず他見て怖れざる底の事を取る、故に曰く、君子創業垂統爲可繼也若夫成功則天也、と成功にあせりて、目的を達するに手段を擇ばざるもの、元より奸曲一世を暗まさんとする、小人的の事、士道を志尙するもの、取るべきにあらず。

○我知言我善養吾浩然之氣

俯仰天地に恥ぢず、前後鬼神に怖れず、至大至剛、唯々終身仁義に離るゝを以て憂とし、一朝の憂の如きは、之れを憂となさざるもの、これを浩然の氣の用となす。

何如にしてこれを養ふべき、曰く、良心の命に背かざるなり、今それ、正式なる招狀を發して、準備萬端となふ時は、貴官尊者の來訪を受くるも、何の恐るゝことなくして、これに應接するを得ん。

然るに一朝秘密なる悪行爲を敢てする時は、天井の鼠一匹に胸中の血の驚湧するを覺ゆべし。

先きには貴官尊者に怖れざりし我が心の、後には一匹の鼠の音に冷汗を生ずる、如何に心に疚しきことの、人の勇氣を沮害するか

を知るべし。

故に良心に恥ぢず、良知を欺かざることをのへ、積み集むる時は所謂、屋漏に耻ぢざる剛氣を養成し、浩々として強勇の極なり、一旦心に疚しきことある時は、その漏れんことを恐れ、浩氣忽ちに飢ツ、故に曰く、集義と、襲義にして能く養ふ所は、人の面前のみ、眞の修養にあらず、故に孟子はこれを排す。

西諺に曰く、習慣は智識の半部を没却すと、良心は必ずしも其儘にして、合理的、適法的なる能はず、古代に於ける士人以上に、自殺は名譽たりしなり、殺人も多くの場合に名譽たりしなり、而かしてこの習慣制度に養成せられたる人の良心良知は、曾てその罪惡たるを自覺せざるなり、理法の漸く闡明せらるゝに至つて、

始めて其の非合理的、非適法的なるを知り、之れを犯せば良心良知の苛責を受くるに至る。故に眞誠に道に徇せんとするものは、良知の外に、外間一般の理法、換言すれば、古今東西の先聖前賢の遺訓と、宇宙萬古不變の道理とを、玩味咀嚼せざるべからず、是に於いてか、言を知る、の要起る。

畢竟するに、孟子の所謂最善の道は、内省と外察とに外ならず、内に心を養ひ、外に智識を求め、内外相待つて、全きを得るに近し。

宋儒明儒の多くは、乃至我が邦、朱子學殊に闡齋派の如き、若しくは、陽明學派の如き、大抵内省の功夫に深くして、外察の工夫に粗なり、その高潔なる思想ありて、事功に疎とく、徒善の事に

益なくして終る所以なり、これに反して、事功派、一名、功利派の學者が、外察の用意周到にして、事功見るべきあるも、心術の正しからざる譏を免れざるは、内省の工夫深かからざるに基す。孟子此の點に於いて、既に一頭地を抜くの明あり。

○徒善不足以爲政 徒法不能以自行

車馬ありと雖も、乗載の用なくば、以て貴ぶに足らず、故に善心内に充ちて、救世濟民に焦慮すると雖も、これが實施に至りては各々その術を知らざるべからず、然らずば以て政を爲すに足らずその術を知り、これが法規を設けると雖も、誠實なる心事、強固なる意力なくば、徒法のみ。

故に人、内に善良なる心を養ひ、外に實施の法術を參稽すれば、上者となりては、以て政を爲すべく、下者となつては、以て獨りを善くするに足らんのみ。

○人必自侮然後人侮之

繩の斷つは、自ら斷つる所あるなり、魚や肉や、必ず腐爛の個所ありて、然る後虫これに生ず、人の己れを侮るに至るや、必ず自ら侮らるゝ基因を養へるなり、自己はこれ當成聖人的のもの、唯その已成聖人たらざるのみ、砥し礪し、磋し鍊し、向上の一路に日新の工夫を重ね、上求の一念に、進修の路程を辿り、一點の過失も、これを改むるに吝ならず、微小の善事も、これを修むるに

惰らず、常に自己これ當成聖人的の者と、自重し、勇猛なる精神を驅りて、遠大なる任務を自覺する時、誰れか尊仰の衷情に、嗚然たらざるものあらんや。

富貴も淫する能はず、威武も屈する能はざる底の漢子、天下の廣居に安坐して、宇宙の正路を進むの丈夫、たとひ路窮して、進退谷はまるの日に逢ふも、天行健にして、窮すれば變ず、其の一陽來復の秋を迎ふる、決して遠きに非ず、よしや一代の人知己なきも、千秋の下に相識を得る、渺たる五十年の人生として、無上の快心事にあらずや。

同時代に處する人間の、誹譏嘲笑は、或は彼等の衷情より然るにあらずして、猜妬の情に、眞實は敬服しながらも、心ならぬ言語

を弄することあり、毀譽の捕虜たらぬものこそ、眞誠自信自重の好人格。

○聽其言也觀其眸子人焉度哉

自ら視て不正なりと思惟する所あるものは、言語紊れて、自信の薄きを證し、惡事を犯せることを自覺せるものは、人の己れを觀破せんことを恐れ、目たぢろぎて、正視するに堪へず、尻目に見るもの、心事、上眼に窺ふもの、胸中は、必ずそこに、言ふべからざる恐羞の情を包む。

蓋し人性は善なり、良知の明は惡人にも絶ゆることなし、唯々自ら欺き、人を欺かんの邪曲私智に、一時を糊塗し去ると雖も、苦

愁煩悶の應果は、來りて腔子裡を攪亂し、分時の安きことなき掩はんと欲して、彌々顯はる、申譯けは過失の證跡なりと、俚諺の眞なる、戒慎に價せずや。

○有不虞之譽有求全之毀

注意や行爲や、未だ以て譽を得るに足るものなく、而かも、偶ま聲譽の來ることあり、多く貴ぶに足らず、完全無缺行道の純ならんことを求めて、却つて毀りを得るの時あり、未だ賤しむべからず、君子世に處し、事を治する、唯その實徳如何を顧みんのみ、以て恐るゝに足らず、以て喜ぶに足らず、以て人を取るべからず、以て人を捨つべからず。

蓋し人、多くは言ふて其責任を帯びず、輕かるしく譽め、輕かるしく毀る、何ぞ屹々これに従ふの要あらんや。

○人之患在好爲人師

學術に通達し、智慮に明らかならんとするものは、自己天稟の材能に應じ、安慰なる地位上に、正々堂々の分を盡し、自然に循ひ人事を全うせんとするに外ならず、若し夫れ、人の師となるは、已れ余力ありて、人之れに資し、已むを得ずして、これに應ずるのみ、故に一義の明らかならざる、一理の曉り得ざるあれば、孜孜として求めて已まざるの概あり、これその根本思想たる、已れを完ふするに意あればなり、然るに今、自ら好んで人の師たらん

とするものは、師たるの地位を得て小成に安んじ、知らざるを枉げて知るとなし、進修の氣力衰退して、習はず實驗せざるを、得々として、口舌に傳へ、自己の教養せる子弟が、荒き世上の風波に逢ひて、如何に艱苦漂浪の裡に揉まるゝかの悲惨を想倒して、これが實際指導の任を負はず、無責任も亦た極まるものと云ふべし。

多くの徳目は修身倫理の先生によりて傳へらるゝ、然かも吾人は、その學校に於ける教程を、眞實世間に行ひたる時に、猶ほ幸福なる快心事を、彼等子弟に與へざるの現状に泣かざるを得ず、これ好んで人の教師たる者の多きに基因するなからんや。古之學者、爲己今之學者爲人と、論語の言、一考再思して、自ら誤らず

人を賊せざるの覺悟の必要を、痛切に感せずばあらず。

○孟子曰、人有不爲也、而後可以有爲。

稻に宜しく、麥に宜しく、豆に宜しく、黍に宜しき田は、米麥黍豆何れも終に名産たる能はずと聞く。

學術に技藝に工に商業に、一廉のものは、皆その源を專念の工夫、一意の修練に發せざるなく、彼れも能くし、此にも通じ、所謂器用なる人、程各方面の小用に役せられ、終身孜孜、唯器用者として、氣の毒なる生涯を村の重寶者として送り、自ら得々として、朽つるに至る。

紛華の道義と併行しがたき、彼れを取らんと欲すれば是れを捨て

ざるべからず、豪奢は半面に没義道を意味し、行道は側面に貧窮を意味す、血氣ある青年の迷ふは茲なり、凡そ青年妙齡の男女は周邊凡べて是れ愛塊戀團、巧名百歳に垂るゝも願はしく、豪奢一世に誇るも慕はしく、たとひ悖德犯道となるも、絹布づくめに―否々々、たとひ蓬頭弊衣に簞るゝも、大道任せに―否々々、迷ふは茲なり、廣き人生の上り框ち、一步を誤れば千里の差、長徑細溪顛がり易く迂り易し、周到なる注意、勇猛なる發心、強固なる立志に、人有ル不ル爲ス也而後ニ可シ以テ有ル爲スを三唱すべし。正しき路程の標榜は、そこに突如として、胸中に建たん。

○博學而詳說之將以反說約也

クハヒテ カニクハチ ユ テ ツテ カント テ スルニ

博覽強記は貴ぶべし、然かれども、唯これのみならんには、一個の善音機にて足る、詳說微解は貴ぶべし、然かも唯これのみならんには、一部の辭書にて足る、靈あり、血あり、涙あり、肉ある人を煩はすに及ばず、人の學に志す、必ずこれを消化して、自己處世に應用し、兼ねて民衆を救はんとするに外ならず。博學詳說は以てその資料たるに足るのみ、その多きに誇り、詳かなるを示さんが爲ならず。

故に、論語を讀むことの巧みなるものは、論語の句章を逐ひて解義するものにあらずして、書中一貫の義理を要約して把握する人であり、プラトーン全集を見ることの巧みなるものは、その何頁にかくくといふにあらずして、書中一定の意味を要約して把了

する人にあり。

記憶は元より難し、消化は更に難し、故に今時記憶學者は多くして、消化學者少なく、學理の詳密なる割合に、應用の廣大ならざる所以なり。

○西子蒙不潔則人皆掩鼻而過之

沈魚落雁のたとへ、羞月閉花のくらべは古るけれども、漢土の西子、日本の小町、美婦人のかつみと云はるゝ人も、糞尿を顔に塗り立てゝは、誰れか好んで之れに向はん、鼻つまみする所以なり。醜惡痘痕色素の黒き婦人として、齋戒沐浴する時は、神に仕へて神享けん。

道の行はれざるは何の故ぞ、賢者は以て行ふに足らずとす、即ち西子の不潔を蒙むるもの、愚者は以て行ふに勝れずとす、即ち醜婦の齋戒沐浴を試みざるもの、才學に誇りて鼻高き人、愚劣に安んじて進まざる輩、共に濟度に法なき、未成品と云ふべし。

○學問之道無他求其放心而已矣

生命は人の欲する所、然れど欲する所の、生命より大なるものあり、故に苟も生さず、死亡は人の厭ふ所、然れども、厭ふ所の、死亡より甚だしきものあり、故に苟も避さず。若し人の欲する所、生より大なるなく、人の厭ふ所、死より甚だしきなからしめば、生を遂げ、死を免るゝ一切の手段を、何ぞ盡

さいるの理あらんや。

一簞の食、一豆の羹、これを得れば生き、得ざれば死すてふ、窮迫の場合にも、噉爾として與へ、蹴爾として授れば、行路乞丐も、之れを受くるを屑しとせず、故に欲す所生より大に、厭ふ所死より甚しき—義心—は、獨り君子に存するのみならず、人間普遍の通性なり、唯賢者はこれを操守し、不肖者はこれを放失せるのみ。

然るに千金萬金とあれば、禮義を辨せずしてこれを受け、一點我が人格に増益する所なき金銀に、眼を味まし心を腐らるは何の故ぞ、遊傲のためか、美服のためか、高樓のためか。

さきには身の死するをも顧みずして斥けんとしたる非禮を、今や

遊傲美服高樓のために、受けて恤ぢざるは何ぞや、物品の多寡を云ふなかれ、多きも寡なきも非禮たるに於いて一なり、非義たるに於いて別なし、これ所謂、本心の放失なり、何ぞ求めて正路に歸らざる。

一頭愛犬の紛失に、百金の賞を懸けて求むる富豪はありながら、胸中本心の放失を恬として顧みざる、かくて天下は太平なり、而かもその人たる資格は、遠き昔に捨たりたるなり。

木なきは山の質にあらず、伐採の繁くして、殖林の疎なるが爲なり、仁義の心なきは人の性にあらず、私情の斧鋸に伐採せられて良心の殖林を缺けばなり。

容貌の人に如かざる、猶ほこれを恥づるを知る、容貌の生命は二

十年を出です、千歳に活歩する精神の人に如かずして、恥づること
を知らざる、小慾あつて大慾なき、無慾の人の多きか那。
操則存舍則亡とは心の謂なり、故に曰はく、學問之道無他
求其放心而已矣と。

○欲^{スルハカフント}貴者人之同心也人々有^キ於己者弗^レ思耳

天爵なるものあり、人爵なるものあり、仁義忠信、善を樂しみて
倦まざるものは天爵なり、公卿太夫は人爵なり。

仁義忠信は人の通性にして、養成宜しきを得れば、一時に寂寞た
りと雖、千歳に光輝を放なつ、公卿太夫は貴は貴なりと雖も、
若し其の徳を具へざれば、身死して貴も亦た去る、太政大臣關白

の名を暗記せざる吾人も、中江藤樹の名は常に胸中に存す、噫、
布衣貴きか、祿位貴きか。

武勳ありとしてよりも、行徳高しとして人常に王陽明を貴ぶ、彼
れの貴きは、祿位の有無に關はずして、人格の偉大なるに在り
此の故に人格にして偉大ならば、富貴功名あるも亦た可、なきも。
亦た可、その尊重すべき程度に於いて、些の徑庭を生ぜざるなり。
若しそれ人格なく品性卑しく、唯上長官に援引せられて貴き輩は
一旦上長官の怒りに觸るれば忽ちにして賤し、彼等の貴きは、免
職せられざる短日月に止まるべければなり。

釋迦は王位を捨てたり、而かも平凡なる王たりしよりは、千古に
貴し、孔子、耶蘇、ソクラテス、その貴きを萬世に垂る 所以の

ものゝ、一片無形の高潔なる心事のみ、一心縮小すれば、一家を治むるの用もなさを、擴大すれば、古今東西に模範となる、ゴムの袋のそれよりも、伸縮の差の甚だしきは、吾人心中の作用にあらずや、而して把柄は自己の権内に屬す。

取るべき路は、唯の二々筋、曰く大道、曰く細逕、左すれば尊貴府に入り、右すれば卑賤村に至る、尊貴府に至らんとして、右する人の多き、故に曰く弗思耳と、況やこれを自己心中に求むるの繁雜なる試験を要する外面に求むるよりは、簡易にして必得なるに於いてをや。

○君子所過者化^{ハケル}

彼れありしが爲めに、此の一家はかく好果を得たりと云はるゝは下民最上の徳なり、彼れありしが爲めに此の一村はかく改善を得たりと云はるゝは、村吏村夫子最上の徳なり、彼れありしが爲めに一郡一郷がかく開明を得たりと云はるゝは、郡吏郷先生最上の徳なり、乃至は一地方に、一邦家に存在の印象を興へて、始めて存在の價值あるなり。

道を履むことの深く、徳を積むことの厚く、入るとして自得せざるなき君子者に至つては、家にあつて家を善くし、郷に在つて郷を改め、國に在つて國を開く、過ぐ所は悉く化せざるなき大なる感化力は、誠意忠信の素、内に養はれて、麗朗秀徹の識、外に施せばなり、内に養ふ所なくして、外にのみ施さんとするは、君子

者にあらず、故に曰く、誠於中形於外と、形はれば人これを則り、云はずして悟り、諭さずして行ふもの、これを感化と云ふ、瞿曇は曰く、以心傳心と、かくてこそ、君子なり、大教育者なり思はざるべけんや。

○人之有德慧術知者恒存乎疾疾

疾疾は猶ほ災患の如し、艱難を経過したるものに同情心あり、苦痛を嘗味したるものに相憐の情あり、緇根錯節を截斷したる所に利刀は存す。

君に遠けらるゝ孤臣、親に疎んせらるゝ孽子、彼等は常に周邊の不安に、戦々兢々として、深く慮り、固く守る、故に事物の理に

通達するを得るなり、艱難玉成汝、の意味と一般、往事は現在の鏡なり、現在は未來の砥石なり、苦痛災患に當つては、當るを得るの修練を獲得すべき大學校なり、順ひて正命を受け、徳慧術知の増加を謀るべきなり。

○恭敬者幣之未將者也

禮意心に満ちて、之れを表はすに物品を以てす、これを進物と云ひ、幣帛と云ふ、故に物品の贈呈には、必ず恭敬の先づ哀情に溢るゝ者なかるべからず、弔意なき香料、慶意なき賀品、これを虚禮と云ふ、人或は思へらく、物を贈れば足り、品を與ふれば足りと、これ他の乞丐視するなり、奴僕視するなり、故に論語に曰く

禮云禮云幣帛云乎哉と。

君子の取る所は、其心にあつて、其物に非ず、故に一物の微なるも、恭敬の意の満つる所は、喜んで之れを受け、千金の多きも恭敬の意の足らざる時は、受くるを屑しとせず。

歳晩や、中元や、人に托して高價なるものを送らんよりは、寧ろ自ら訪ひて一物をも、致さざる方に、眞の恭敬は包まるゝものなり。故に曰く、恭敬而無實君子不可虚拘と、唯小人の射利心強きものに於いてのみ、物を論じて、その意を問はざるの風あり、苞苴の猶ほ勢力ある所以なり。

○梓匠輪輿能與人規矩不能使人巧

ナシテ ナラシムル

大工や輪輿即ち車大工の師たるものは、方圓を形成すべき一定の規矩を授く、而かも技術の工不巧は弟子の力に存し、師もこれを矯むるを得ず。

時に機あり、物に妙あり、これを捉捕するは、必ず心悟融念心に知るべくして、人に語るを得ず、人より受くるを得ず、語るべく授くべきは、一定の形式のみ、法度のみ、活用は人に存す、同一の學校に、同一の先生に學びたる人にて、多大なる差異を生ずる所以も亦た茲に存す。

釋迦の一字不説と云ひ、老子の知者不言と説き、孔子の我欲無言と語れる、皆その眞理の奥妙なる、言語の能く説明すべきに非らざるを以てなり。

○好名之人能讓千乘之國苟非其人簞食豆羹見於色

名聲を釣らんとする野心家は、情を矯めて千乗の國を他に譲るを得ん、而かも心中眞に道に熟する所なくば、簞食豆羹の小得失に猶ほ顔色を變ずるの陋あるを免れず。

百金を慈善事業に抛ちたる富者あり、下婢の一個の茶碗を取り落して破りたればとて、叱責歐打するを見たり、前の百金は以て名を買ふがために惜しまず、後の一椀は得る所なきを以て怒る、これ事實談なり、而して、現時の慈善家篤志家に、この種の心事を抱くもの蓋しその八九分を占めんか。

○有命焉君子不謂性也有性焉君子不謂命也

眼の美色を好み、口の美味を好み、耳の美聲を好み、鼻の良香を好むは、人の性なり、然れども、その性を肆にすを得ざるは、命の存任がこれを許さざればなり、故に君子は節情制慾して、敢て性と謂ひ放任逸肆ならざるなり。

仁義禮智の心に於ける、その用の厚薄、その才の大小、先天に屬する處少をからず、所謂命也、然れども、切磋琢磨の工夫を以て小を大に、薄を厚に、進修増益の道なきにあらず、故に君子は、命として放失什散せざるなり。

性の慾を遂げんとして、命を顧みざる者は小人なり、命の儘に安

んじて、性の美を磨かざる者も小人なり、然人事待天命もの
始めて與に語るべきのみ。

四書活解終

明治四十三年十月十日印刷
明治四十三年十月十五日發行

著者

八木龍三郎

發行者

中澤達吉

印刷者

須磨勘兵衛

印刷所

合資弘文社

京都市下京區佛具屋町通七條上ル
(電話四七四三番)



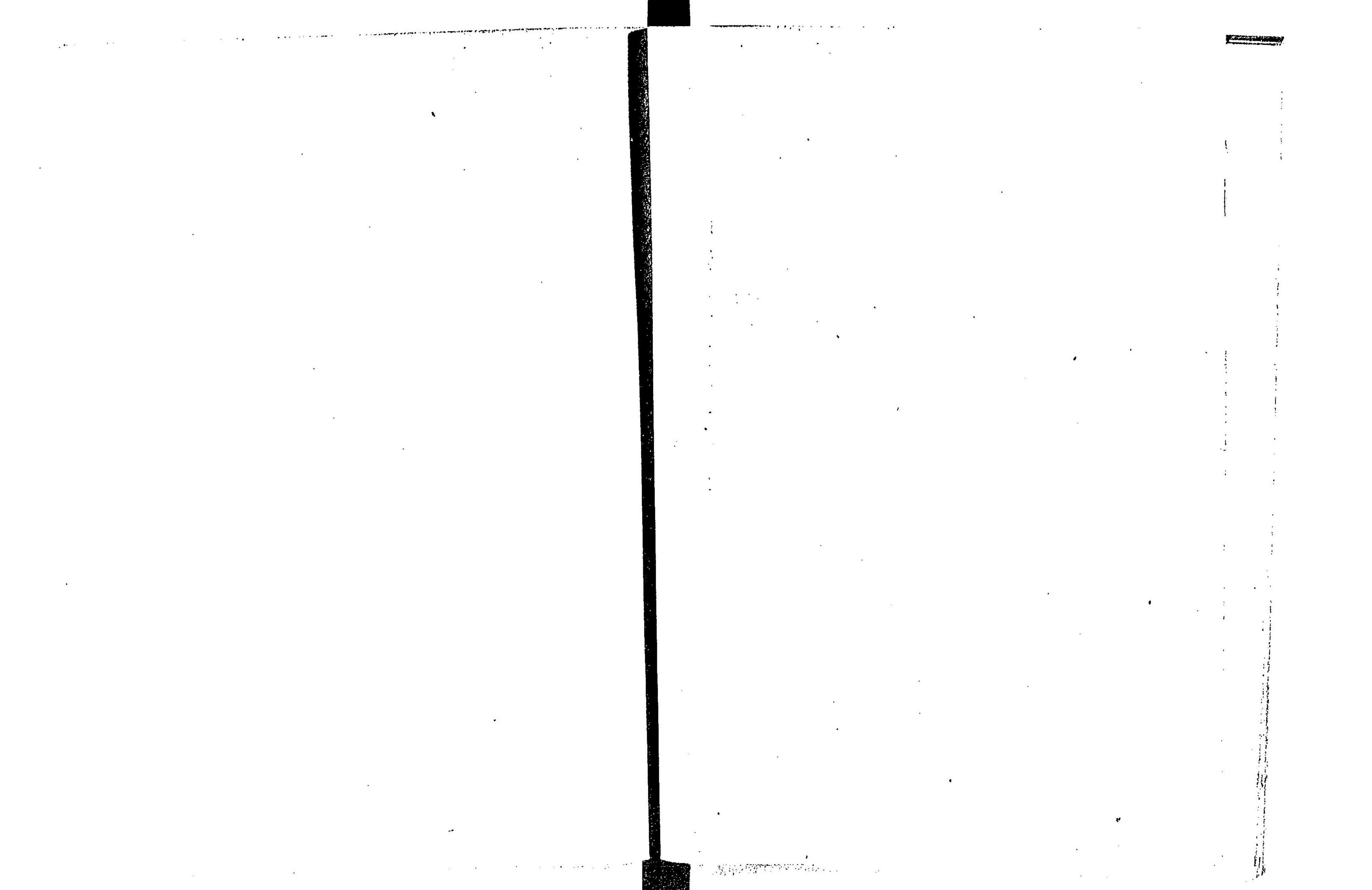
發賣元

京都市上京區寺町通竹屋町南入

中澤明盛堂

口座東京二一四一番

(四書活解與附)



261
657

1954

008507-000-1

特61-917

四書活解

八木 龍三郎 / 著

M43

AAC-1186



9

